

第4分科会〈古典との対話〉心はそれほど変わっていないと伝えたい

発表者 岡田一心先生

長尾高校の三年生に行った二つの授業例をご紹介します。

① 近松門左衛門『曾根崎心中』と角田光代『曾根崎心中』を並べて読む。

◎現代小説を古典の授業で使うことの意味①

古典作品では、同時代の読者（『曾根崎心中』の場合は観客）に説明しなくてもわかることは書かれていない。しかし、現代人にとっては、この「書かれていない部分」が古典を読むうえでの壁になる。その壁をとりはらうために現代小説を使うことは有効である。

例) 女主人公「はつ」が死ぬ覚悟をする場面

原文では「いつまで生きても同じこと」という「はつ」の一言で表現されている心情が、角田氏の作品では、彼女の境遇をふまえ、よりかみくだいた形で表現されている。

「自分でも驚くほどすんなりと、初はそれを受け入れた。一緒に死のう。(略) そうなればもう離れることはない。会えずに不安に思うことはない。(略) 徳兵衛がほかの女と夫婦になることもない、わたしが田舎ものに嫁ぐこともない。二貫の銀^{かね}を作らなくてもいい、年季がいくら残っているか毎晩のように勘定しなくてもいい。(略) そうか、そうすりゃぜんぶまるくおさまるんじゃないか。(略) 初は笑い出したいのをこらえて言う。『いつまで生きてたっておんなじこと。(略)』」(角田光代『曾根崎心中』)

◎授業の進め方と生徒の反応

授業では原文を読み進めながら、必要な箇所では角田氏の『曾根崎心中』を読むという形を取る。そうすることで、生徒たちは作品をよりリアルなものとして感じ、その世界に没入していく。授業の初めには「なんで死ぬ必要があるの?」と言っていた生徒の中には、読み進めていくうちに、泣き出す者もいる。また、生徒の中から「原文の中に『はつは白無垢、死に出立ち』とあるけれども、これは彼女にとって死に装束ではなく、婚礼衣装なのではないか。」といった意見も出てくる(実際に近松の作品では、途中まで「男」と表現されていた恋人が、最期の場面では「夫」と表現されている)。生徒が自ら考え、感じ、読みを深めている様子が見えてくる。

② 『源氏物語』若紫と林真理子『六条御息所 源氏がたり』を並べて読む。

◎現代小説を古典の授業で使うことの意味②

心情を表す形容詞・形容動詞や、助動詞の持つ意味を決まりきった形で訳しながら読むことは可能である。しかし、本当にその言葉や文法的働きの持つ意味を生徒に理解させられているだろうか。原文と現代小説の中での表現を対照することで、より立体的なイメージを生徒に伝えることができる。

例) 「けり」の詠嘆用法

原文「惟光の朝臣とのぞき給へば、たゞこの西面にしも仏^{ほとけ}据へたてまつりてをこなふ、尼なりけり。」

林氏「柴垣のこちら側に立ちますと、意外なものが目に飛び込んでまいりました。そこにいるのは若い女でも女童でもなく、中年の尼だったのです。」(林真理子『六条御息所 源氏がたり』)

⇒「尼なりけり」を単に「尼だったのだ」と訳さず、「意外なものが目に飛び込んでまいりました」、「若い女でもなく女童でもなく、尼だったのです」といった表現から、助動詞「けり」の持つ「詠嘆」パワーをより感じとることができる。

分科会の参加者による感想

文法事項の解説やそれに則った口語訳にとどまらず、古典の面白さを伝える授業をいかにして展開するか、日々苦闘しているが、生徒が生き生きと昔の人と対話していけるような古典の授業を目指したいと感じた。

(記録者 藤田博子)